様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０２４７２

研究課題名（和文）Malayo-Sumbawan言語における定性標示と文構造との関係に関わる研究

研究課題名（英文）Malayo-Sumbawan

研究代表者
塩原　朝子（Shiohara, Asako）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：３０３１３２７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、インドネシアで話されている言語のうち、Malayo-Sumbawan諸語と呼ばれる言語の定性表現（英語の定冠詞に相当する表現）を調査し、以下の点を明らかにした。(1) Malayo-Sumbawan諸語のうち、マレー語の標準変種（標準インドネシア語、マレーシア語）、ササク語、スンバワ語には意味的に定冠詞に相当する要素は存在しない。一方、マレー語の変種（口語インドネシア語、マナド・マレー）とバリ語は定冠詞に相当する要素をそれぞれ独自に発達させている。(2) 当初仮定していた定冠詞の発達の有無と態の対立を中心とする文構造の相関関係は見られないことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
英語の定冠詞などが担う定性標示は、標示が一般的である印欧語などにおいては重要な研究テーマとして取り上げられてきたが、比較的未発達な言語では十分な研究が行われてこなかった。本研究の意義は後者の言語群に属するMalayo-Sumbawan言語を対象に定性表現の諸相を明らかにしたことである。バリ語、マナド・マレーなど定性標示が発達した言語の記述を通して、Malayo-Sumbawan言語というグループ内、さらには、一つの言語の変種間でも定性表示の発達の度合いに差があることがわかり、定性標示が独自に発達しうることを示した。

研究成果の概要（英文）：This project investigated the distribution of definite marking of Malayo-Sumbawan languages. The main findings are as follows.
(1) Standard varieties of Malay, Sasak, Sumbawa have not developed definite markers, while some Malay varieties such as colloquial Indonesian and Manado Malay, as well as Balinese, has developed definite markers.
(2) Correlation between the development of definite marker and the clause structures that each language (or variety) exhibit that initially hypothesized was not observed.

研究分野：言語学

キーワード：形態統語論　談話論　インドネシア語　マレー語　定性表現　定冠詞

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

英語の定冠詞などが担う定性標示は、標示が一般的である印欧語などにおいては重要な研究テーマとして取り上げられてきたが、それ以外の言語では十分な研究が行われてきたとはいえない。本研究で対象とした Malayo-Sumbawan **言語（マレー語の諸方言、バリ語、ササク語、チャム語、スンバワ語）も定性標示の研究が比較的未発達な言語である。本研究では、まず、** Malayo-Sumbawan **言語の包括的な記述と、名詞句の定性標示に関してこれらの言語が示す談話的特徴の解明に貢献するため、さらに、定性標示に関わる通言語的な研究に貢献するために、個々の** Malayo-Sumbawan **言語が持つ定性表現の諸相の調査・分析を行なった。研究開始の段階で、いくつかの言語（バリ語や口語インドネシア語）では定性標示が発達していることがわかっていたため、それらの言語における標示の記述から研究を開始した。**

２．研究の目的

各言語がいわゆる定性（同定可能性や唯一性）を示すために用いる形式とその用法の詳細な記述を行うこと、さらに、定性表現の発達度合いと各言語の文構造の違いの相関関係を調べることを目的とした。具体的には以下の事柄を目的とした。

(1) 既に定性標示が発達していることが知られているバリ語や口語インドネシア語について、その形式と機能の詳細を明らかにする。

(2) 定性標示についての先行研究がない言語（マレー語の諸方言やスンバワ語、ササク語、チャム語）については、母語話者からの聞き取り調査や物語などのテキスト分析を通して定性標示がどのように行われているかを明らかにする。

(3) (1)と(2)を通じて明らかになった各言語の定性標示の方法の差異が、文法的態の対立など文の構造と何らかの形で相関しているかを明らかにする。

３．研究の方法

各言語の定性標示の方法を明らかにするために、母語話者の協力を得ての聞き取り調査と書きことば・自然発話のデータを分析する手法をとった。

聞き取り調査では、まず、英語の定冠詞の様々な用法を反映する英語の文例をリストし、次にその文例をインドネシア語に訳す形で調査票を作成した。この調査票を用いて調査を行い、調査対象の各言語における定性標示の概観を明らかにした。英語の定冠詞に相当するような定性標示が存在する言語に関しては、調査票から離れて追加の聞き取り調査を行うとともに、自然発話や書きことばなどのテキストを網羅的に分析することにより定性標示の形式が示す機能を明らかにした。

４．研究成果

(1) **定性標示が発達している言語の一つ、バリ語に関してウダヤナ大学の** Artawa **教授と共同での研究を行い、その成果をいくつかの国際学会で発表するとともに、**Shiohara and Artawa (2015) **として公刊した。その成果の概略は以下のとおりである。**

・バリ語の定性を示す標識である形式=*é* **は名詞句の冒頭に現れる主名詞に付接する、いわゆる** second position **クリティックである。独立形の指示詞と共起する（例：**anak=é ene （[person=def this]**「この人」）ことから、英語とは異なり、定性標識は指示詞と異なる統語的ステイタスを持つことがわかる。**

・クリティック=*é* が付接した名詞句は、英語の定冠詞など、定性を示す標識の多くが共通して含む意味的領域のうち、同定可能性 identifiability は示すが、唯一性 uniqueness は示さないと考えられる。このことは、クリティック=*é* を含む名詞句が発話場面に存在する事物や、談話に既に導入されている事物を指す用法（直接指示用法）だけでなく、直接指示されるものから連想される事物を指す用法（間接指示用法）」は持つが、聞き手が明らかに見知らぬもの（例「ガーナの国王」）は指さないことからわかる。

(2) バリ語以外の言語に関する調査により、Malayo-Sumbawan 言語のうちササク語、スンバワ語、チャム語ではバリ語のような形での定性標示は発達していないことがわかった。これらの言語のうち、ササク語、スンバワ語では指示詞の独立形と付属形の形式の対立があり、そのうち特に非近称の指示詞の付属形が前方照応に用いられる。しかし、少なくともスンバワ語においては、指示詞の生起はどのような条件においても義務的ではなく、また間接指示用法は持たない。このことから、これらの要素の機能はあくまで指示詞の範囲内にあり、定性に特化した標示は発達していないことがわかる。

(3) 同じくバリ語以外の言語に関する調査により、マレー語のリンガフランカ変種の一つであるマナド・マレー（インドネシアのスラウェシ島北部で話されている変種）では、二種類の定性標示が用いられていることがわかった。この標示について調査・分析し、いくつかの国際学会で発表するとともに、Shiohara and Artawa (2015)として公刊した。その内容の概略は以下のとおりである。

・マナド・マレーには 2 つの定性標示が存在する。一つは遠称の指示詞から派生した形式 *tu* で、こちらは直接指示に用いられる。もう一方は３人称属格から派生した形式 *depe* でこちらは間接指示に用いられる。この二つは共起可能である。このことから、いわゆる「定性」が直接指示と間接指示の２つの意味領域に分かれて標示されうることがわかる。

(4) (1)-(3)から、Malayo-Sumbawan 言語は定性標示が著しく発達している言語、発展途上にある言語、ほとんど発達していない言語に分類できることがわかった。この発見を基盤にこのような定性標示の発達度合いと、それぞれの言語の構造的特徴の相関関係の有無について調査を進めた。その結果、当初仮定していた定性標示の発達度合いと文法的態の対立の有無の相関関係は見られないことがわかったが、定性標示と基本語順（構成要素順）の相関関係はある程度認められそうである。この点については今後のコーパスを用いた調査で検証する予定である。

(5) 定性標示は語彙名詞＋定性標示の組み合わせによってだけではなく、代名詞によっても示されうる。Malayo-Sumbawan 言語のうち、インドネシア東部で話されているリンガフランカ・マレーに属する変種群では、動作主を表す要素が定性を持つ場合のうち、その要素が聞き手の認知の中で特に活性化されている場合、常に３人称代名詞でほぼ義務的に標示され、いくつかの変種では語彙名詞句と一致を示す場合もある。本研究ではその点についても調査を行い、その成果についていくつかの国際学会で発表を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 Asako Shiohara	４．巻 65
２．論文標題 Recent stylistic changes in Indonesian recipes observed in voice selection	５．発行年 2019年
３．雑誌名 NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia	６．最初と最後の頁 67-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/92900	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Asako Shiohara and Anthony Jukes	４．巻 －
２．論文標題 Two definite markers in Manado Malay	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Perspectives on information structure in Austronesian languages	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Asako Shiohara	４．巻 1
２．論文標題 Pseudo-cleft construction in the Sumbawa Besar Dialect of Sumbawa	５．発行年 2016年
３．雑誌名 AFLA 23: The Proceedings of the 23rd Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association (Canberra: Asia-Pacific Linguistics)	６．最初と最後の頁 258-272
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Asako Shiohara	４．巻 59
２．論文標題 Voice in eventive coordinate clauses in Standard Indonesian	５．発行年 2016年
３．雑誌名 NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia	６．最初と最後の頁 47-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Asako Shiohara and Ketut Artawa	4．巻 なし
2．論文標題 Proceedings of the Second International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages, 25 December 2015	5．発行年 2015年
3．雑誌名 Proceedings of the Second International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages, 25 December 2015	6．最初と最後の頁 141-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Asako Shiohara, Yuta Sakon, and Hiroki Nomoto	4．巻 67
2．論文標題 Discourse functions of the two non-active voices in Indonesian: Based on the web corpus data in MALINDO Conc	5．発行年 2019年
3．雑誌名 NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia	6．最初と最後の頁 77-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/94453	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　2件／うち国際学会　9件）

1．発表者名 Asako Shiohara
2．発表標題 Coding of “active” referents in Malay varieties
3．学会等名 he Twenty-Second International Symposium On Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL 22)（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 Asako Shiohara
2．発表標題 Coding of “active” referents in Malay varieties
3．学会等名 ICAL14: fourteenth International Conference on Austronesian Linguistics, International conference（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 Asako Shiohara and Anthony Jukes
２．発表標題 Development of two definite marking strategies in Manado Malay
３．学会等名 The Twenty-First International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL 21)（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Anthony Jukes and Asako Shiohara
２．発表標題 Possession and Reference in Manado Malay
３．学会等名 The Twentieth International Symposium On Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL 20)（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Asako Shiohara
２．発表標題 Voice in “Eventive” Coordinate Clauses in Standard and Colloquial Indonesian and Sumbawa Malay
３．学会等名 The Twentieth International Symposium On Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL 20)（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Asako Shiohara and Ketut Artawa
２．発表標題 The definite marker of Balinese
３．学会等名 第7回 Austronesia/ non-Austronesiaの言語と文学セミナー（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2015年

１．発表者名 Asako Shiohara and Ketut Artawa
２．発表標題 The definite marker of Balinese
３．学会等名 ISLOJ5: 第五回ジャワ島の言語学会（国際学会）
４．発表年 2015年

１．発表者名 Asako Shiohara and Ketut Artawa
２．発表標題 The definite marker of Balinese
３．学会等名 第13回国際オーストロネシア言語学会（国際学会）
４．発表年 2015年

１．発表者名 Asako Shiohara and Yanti
２．発表標題 Capturing Emerging Indonesian Varieties using a Picture-task to Elicit Semi-spontaneous Narratives
３．学会等名 INLALI: Indonesian Languages and Linguistics（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Malay varieties website https://malayvarieties.aa-ken.jp/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考